

古代ギリシアにおける「共同食事」の意義に関する考察 ～共食文化・教養形成の起源をさぐる～

*An inquiry into some thoughts and significan concerning on the symposium
in ancient history of Greek ; the search for the origin of Greek
symposium and the formation of character*

新村 洋史 *Hiroshi Shinmura*
(美術学部教養部会)

序 問題関心と研究方法について

今日、「共食」「共食文化」は、民族学、民俗学、歴史学、家政学、栄養学などにおいて学術用語となっている。それらは現実社会の問題として、人類史の古典・古代の時代において、そして現代においても「教育」の課題とされている。今日では世界的にかつてない広がりにおいて「食育」「食教育」あるいは「栄養教育」(フランスの『国家栄養教育法』2004年、など)は社会的規模における人間形成の課題として重要視されざるを得なくなっている。人類が人類として生存しつづける限りにおいて、それは未来永劫的な課題でありつづけるといってもよい。

人間が「社会的動物」(アリストテレス『政治学』)である以上、その生存にとって最も基本的な生活領域である食事が「社会的」「共同的」であることは当然であるように思われる。そうではあっても、人類史や世界の国々においてはその時代背景の個性や特殊性によって、その意味や意義は大きく、あるいは微妙に異なる面もある。いずれにもせよ、人類史のなかで考えてみると、「食」の問題が、民族や国家社会の存続発展を左右する根源的な問題であり、また人間の本質(本性)を發揮・形成することにかかわる根本問題として横たわっている問題であると理解することができる。このような問題関心のもとで、有史時代の始まりである古代ギリシアに焦点をあてて、その「共同食事」という慣行・制度、あるいは生活共同体をささえた「食」の営みを検討することとしたい。

古代ギリシアにおける「共同食事」という言葉で表される事柄(意味・意義)は、①家族や部族の代名詞として用いられる場合があった。「共同食事」とは「家」や「家族」そのものをさすものであった。

②また「共同食事」は、特定の市民であることの「資格」や「証」を意味するものであった。それはまた「身分」をあらわすための施設であり社会的営みであった。

③さらには、ポリス国家への忠誠という精神的規律・規範を象徴するものであり、そうした精神的価値(徳)を意味するものであった。

④そして、そういう政治的な市民仲間の間において「連帯感」「親密感」「信頼感」など人と人との緊密な人間関係を保持・強化・醸成するための習慣・習俗(エートス, ethos)

であり、また制度であった。

⑤それは、同時に「子ども・青年の教育」の課題としても重視された。その課題の意味づけは、プラトンの『国家』で提起されている通りであり、またプラトンが創設した「アカデメイア」(大学の元祖・起源)において「共同食事」は実際に行なわれたのである。それは、アカデメイアで 20 年間の長きにわたって学び研究をつづけたアリストテレスにも引き継がれてリュケイオンにおける「学校」の行事活動として行われた。アリストテレスの『政治学』では、諸所において「共同食事」に関する記述を見ることができる。

本論考では、有史(歴史)時代における歴史的記述や古代ギリシアの人々が書き残したもの(伝承・文書など)、また、それらについての歴史学研究成果をもとにして、その歴史・社会的、人間的・教育的な意味について考察していくこととする。

I、プラトンの著作における「共同食事」

1、『国家』(対話篇)におけるプラトンの構想について

プラトンの中期(60歳代)の作品に『国家』⁽¹⁾がある。その第3巻の中に「共同食事」について簡単に言及されている。その部分の文章をかかげれば次のようである。

「暮らしの糧は、節度ある勇敢な戦士が必要とするだけの分量を取り決めておいて、他の国民から守護の任務への報酬として、ちょうど1年間の暮らしに過不足のない分だけを受け取るべきこと。ちょうど戦地の兵士たちのように、共同食事に通って共同生活をする。」(416-E)

『国家』論は、民主政のアイデアを軸にしてポリス国家の再建を試みようとする構想を語り合う作品である。そういう国家と国民とを形成する手立てや教育論が語られるという文脈のなかで上記の「共同食事」に言及されている。この「共同食事」は、子どもだけにむけられた教育方針ではなく、文章からわかるように国家の「守護(者)」(特に戦士・兵士という市民たち)自身が実施・実現すべき施設・生活形態・生活方法として考えられている。

プラトンのいう「共同食事」の根底にある意味を一言でいえば、ギリシア国内外における僭主政の動きや内乱、民主政治への「俗衆の憎悪」、⁽²⁾「蛮族」の侵略・隷属などの危機からポリス国家と市民の「平和」を守ること、「集団の福祉」・「有効にはたらく協同」などを社会と人間個々人の正義・規範として「理想国家」を築こうという意図・文脈から発するものである⁽²⁾。

このようなプラトンの「共同食事」論には、歴史的・現実的基盤があるとされている。特にラケダイモン(ポリス国家名)という国をつくったスパルタ人の間で実際に行われていた「共同食事」をもとにしてるとされる。さらに、「共同食事」という規範的要素を多分にともなった「共同食事」は、ギリシア都市国家の最盛期(紀元前5~4世紀)よりも、はるか昔のイオニア地方やクレタ島の文明の時代(紀元前1100年以前)から発生し

たものであるとも言われる⁽³⁾。(後述、IVの2)

2、プラトンのアカデメイア創設と「共同食事」の意味について

プラトンはみずからが構想した「理想国家」を実現しようとして、シュラクサに3回にわたり渡航した。プラトンをシュラクサに招聘した同地の僭主・ディオニュシス1世は自己の意図に沿わないプラトンを奴隷にして売渡してしまう。プラトンは人生最大の窮地に立ち至った。当地のプラトンを知る人（アンニケリス）によって買い戻されて、ようやくアテナイに帰ることができたのである。プラトンはアテナイに帰ってからアンニケリスにその身代金を返そうとしたが受け取られなかった。その身代金はアカデメイアの土地購入の一部に当てられた。プラトンの考える民主政国家の実現がたやすいことではないことを、このシュラクサへの旅が思い知らせることになったと思われる。また、この体験がアカデメイアの構想を実現に移すきっかけにもなったと思われる⁽⁴⁾。

その1回目のシュラクサへの旅からアテナイに帰還した紀元前387年、アテナイの北西郊外ケピソス川のほとりに学園・アカデメイアを創立した。この学園は「大学の起源」とされる高等教育機関、あるいは成人教育・生涯学習機関であり、「理想国家」（『国家』論に描かれたような）を学び、検討し、共同論議することを主たる目標とするものであった。

厳密な教育課程をもっていたとは言えないが、その教育・学習・研究の土台（予備学園）として数学や天文学、幾何学、音楽理論などの素養（一般教育の根本）の獲得が求められた。その上で、学園の教育・学習は、①学術の専門的研究と、②個々人が人間としてもっている天稟・個性を啓発して人間の卓越性（アレテー）を育み人間らしい完成（自己形成）をはかることであった。前者①では、哲学、科学が研究課題とされ、後者②では、「師弟同行や魂のふれあいによる人間教育」⁽⁵⁾がおこなわれた。

この学園には17歳～18歳から入学が認められ、年齢層はまちまちであったといわれる。授業料は無償とされた。これはソクラテスの信念に倣ったものといわれる。ソフィストたちが高額な授業料を徴収したのに対して、ソクラテスは授業料をとる意思をもたなかった。生徒・学生たちはお互いに「友よ・友人よ」よびあった。そこには上下関係なるものもなかった。かれらの生活費を賄えるような学園の財政事情ではなかったので、それは学生たちの自己負担であった。学生のなかには昼間この学園で学び、夜には粉屋で夜間労働をするという今でいう学生アルバイトをしながら勉学をつづける学生たちもいたといわれる。また、この学園には、アテナイの市民師弟よりも外国人学生・研究生のほうが多かったという。その代表的な学生の一人がアリストテレス（マケドニアのスタゲイラ出身）であった。また、人数はすくなかったが、女性もこの学園で共に学ぶことができた。

以上のように、アカデメイアは学問研究・人間形成の共同体であり、それと同時に、「理想国家」の計画者・立法家などの養成という実践的な課題をその基本的な目標としたものであった。この学園はプラトンの40歳から80歳までの生涯をとおして存続され、以後

900 年間にわたってその営みがつづけられた。川島清吉は、この学園の教育・学習を「世界のヒューマニズム教育の源流」⁽⁶⁾であるとする。ローマ時代のローマ人であるキケロは、このような教育・学習、パイディアを「フマニタス (humanitas)」とラテン語であらわした⁽⁷⁾。アカデメイアでは、学問研究と人間形成とを統合させること、従ってまた知識の教育を強制することを認めなかった。「自由人」にふさわしくないからである。

川島清吉が次のように言うことは、プラトンの各種の作品からもよく読み取れることである。

「元来、プラトンにあっては学問とは知識愛であり教育とは生命愛のことであって、共に人間の完全な形相を憧憬して已まない衝動に起因する。このような衝動はエロスとも呼ばれ、『エロスとは善きものが永遠に自分のものであることを目ざすもの』であるから、人間完成の基礎的衝動であるといえる。アカデメイアでは常に知識愛と生命愛の衝動に溢れていた」⁽⁸⁾。

この文章は、プラトンの『饗宴』での「対話」で語られる言葉をベースに述べられている。プラトンは「共同食事」の教育的・人間形成的な意味を重視していた。「共同食事」のギリシア語は、「シュシテイオン」(食堂)であり、また「シュンポシオン」(饗宴)である。プラトンが『饗宴』で強調していることは、人間としての「美」である徳・賢さ・共同する心への関心・憧れであり、そうしたものを獲得しようとする意欲や人間としての潜在的能力を自覚し発揮することである。また、万人の幸福を考えて「国を治め家を斉えること」「大きな相互の結合と堅い親愛」、そうした人間愛・生命愛・共同愛を人間それぞれ自身が求めているということである。したがって、プラトンが「饗宴」(「共同食事」の形式と内容とにおいて)で追求しようと考えた事柄もこの点に集約できるといえる。⁽⁹⁾

II、アカデメイアにおける「共同食事」について

アカデメイアにおいて、共同食事は一定期間ごと(毎月)に、また折にふれて開催された大切な行事であった。共同食事そのものは学校・哲学学校すなわちアカデメイアだけに限られる行事であったわけではなく、多くの哲学団体や宗教結社などにおいても行われていたといわれる。一定の規則に従い、一定のエートス(精神的雰囲気・心の習慣)のもとで集团的に会食することは、アカデメイアにおいても特別に意味のある生活様式であった。この点についてプラトンは次のように述べている。

「酒をかこんでともに閑談の時を過ごすことも、それが正しく行われるなら、教育に寄与するところじつに大きい」(『法律』第1巻、641 C D)。

「この行事(共同食事)は、魂に関することの世話をしなければならぬあの技術にとって、最も有用なものの一つとなるでしょう」(同上、650 B)。

「酒を飲む人たちの魂は、まるで鉄か何かのように灼熱して柔軟にも若々しくもなるから、したがって教育や形成の能力とその術(すべ)を身につけた人にとっては、指導が容

易となる」からである（『法律』第2巻、671 C）。

アカデメイアにおける共同食事の様子は、およそ次のようであったという。⁽¹⁰⁾

共同食事をする場所は、「食堂」（シュシテイオン）であり、そこに28人程度が集った。馬蹄形に寝椅子が並べられていて、一番左の席が最上席、最右端が最末席で共同食事の責任者が座る、あるいは寝そべる場所となっていた。一つの寝椅子に、二～三人ずつが横たわるというようなセッティングとなっている。これは『饗宴』で描かれている様子とおなじであり、それはアテナイ市民が行うごく普通の「宴会」の様子と同じであったといわれる。

共同食事には一定の「決まり」（様式・慣行）があつて、それにしたがって会食・饗宴は進行する。食堂に招じ入れられた人々は、オリーブなどの花冠をつけたあと、両膝を伸ばして寝椅子（クリネー）に横たわる。そこへ下僕が手を洗う水をもってくる。そのあと、食事が運ばれてきて、そのメンバーたちは手（指）でつまんで食事をする。食事後には浄め水がはこばれて手・指を洗う。これが言わば、第一部である。次の第二部では、神々に対して酒を捧げる灌てんの儀式がおこなわれ、会席者にも酒が出される。川島清吉は、アカデメイアでは、学芸の神であるミューズの神にこの酒が捧げられたとしている。この酒宴は、アカデメイアでは乱暴狼藉に流れていくことがないように配慮（慣行）がなされていた。この点は、『饗宴』を一読すればはっきりとつかうことができる。

その文中には例えば、「ソクラテスは減法酒にも強いが、決して酔っぱらったり酔いつぶれたりすることはない」と書かれている。また、共同食事の飲酒に入ってから、本格的な哲学談義・談論が展開されるのである。真面目な談論そのこと自身が「高級な遊興」⁽¹¹⁾として意識的に営まれたのである。この点に、アカデメイアにおける共同食事の特徴がみられ、また格別の教育的意図や意味づけがあつたといえる。

プラトン自身は、この点について次のように考えていた。

「酒の会合というこのしきたりがりっぱに立て直されるとき、そこに教育の救済もみられる」（『法律』第1巻、653 A）。

「酒をかこむ会合が、正しくとり行われる場合には、ずいぶん真剣になって考えるに値する、なにか大いなる利益がふくまれる」（同上、652 A）。

以上のように、プラトン自身が共同食事や饗宴（シュンボシオン、synposion）を学園における重要な行事・教育的活動と考えており、またその意図や意味が実現されるように細かな配慮をしていたことがわかる。このアカデメイアの共同食事に招かれた人物の感想も残されている。次のような話がそれである。

アテナイの有名な将軍であるティモテノスは日ごろから贅沢な宴会に招かれ、それに慣れてしまっていた。あるとき、プラトンに招待されてアカデメイアのシュンボシオンにくわわった。「質素ながらも知的な香りの高い雰囲気の中に」歓待された。帰宅したのち、この将軍は家の者に次のように言った。「プラトンの宴会に加わった人々は翌日も気分爽

やかに過ごしている」と。そして、翌日、プラトンとであった際この將軍は、「プラトンよ、あなた方は今日のためよりも明日のために食事をなさっておられるが、これは立派なことです」といって、称えたといわれる。これは紀元後 2～3 世紀前半を生きたクラウディウス・アエリヌス（イタリア）の伝承・記録によるものである。⁽¹²⁾

また、同じ時代を生きた文筆家のアテナイオス（イタリア）は、プラトンのシュンボシオン（共同食事）は自堕落な雰囲気とはまったく縁がなく、くつろぎと会話の楽しみを求めてお互いが愉快地に交わることが常であったと記録している。⁽¹³⁾

この「共同食事」の食事内容もまた、質素なものであるといわれる。プラトンの『国家』（第 2 巻）には、食物に関する対話があるが、ここから推察するに質素な食物・食事とは次のようなものであったと思われる。すなわち、大麦や小麦で作られたパン、チーズ、2～3 種類の野菜で作られた煮物（一皿）、季節に応じたデザートとして無花果、豌豆（エンドウ）、空豆などが出されたと考えられる。肉や魚は裕福には供されなかった。そうであっても、先にのべた將軍ティモテオスが、「アカデメイアのプラトンの共同食事は楽しかった」し「二日酔いしなかったことをプラトンに感謝する」と述べているように、節度があって学問的な香り高いものであったことにこそ、その会食の楽しさの核心があったことに留意したい。

共同食事における「おいしさ」「楽しさ」は、食物や酒（葡萄酒の水割り）についての味覚や感覚的（受動的な知覚）なものや、食事・酒そのもの「おいしさ」を享受できる「楽しさ」に尽きるものではない。そこに個々人が居場所を認められ、主体的な存在として仲間たちとの関わりを作っていくという人間的環境が作られたことこそが、そのかけがえのない不可欠の貴重な要因であるといわねばならない。それこそが人間・人格における「おいしさ」や「楽しさ」として統合されるものである。それが人間や生き方のアイデア（善のアイデア）として、個人と集団・社会の生命を励ます最大の力となっていくものである。このように考えることによって、『饗宴』で語り合われていること（善く生きることへの人間の衝動・意欲＝エロス）と共同食事で意図され、また獲得される「楽しさ」「おいしさ」とが一つのものとして人間的な本質を生き実現されることになるといつてよい。

このようなアカデメイアにおける「共同食事」の意味について、川島清吉は次のように書いている。

「ミューズは学問の神々であり、アカデメイアはこの神々に捧げられ、毎月、酒宴と共同食事の行事があった。プラトンはピュタゴラス教団にならって『共同食事』（シュンボシオン）を行ったのであろう。これは『友情の共同体』（Gemeinsamkeit des Freundesgutes）というピュタゴラス教団の公理を実現することができ、学園はこれによって親密さを深め統一を保つことができた」⁽¹⁴⁾。

プラトンの「共同食事」とは、生命を慈しむエロスと学問・知識に対する尽きることのないエロスとを共に同時に育むこと、その土台・母体として人間の善き生き方を憧憬する

人間集団・人間共同体を醸成することを目指すものであったと意味づけることができよう。アカデメイアという施設（学園・共同体）そのものが、大きな意味の次元において「共同食事」という営みであったともいえる。すなわち、「共同食事」とは、共に生きる場、共に学び研究する場（共同体）そのものであることを意味する。

Ⅲ、アリストテレスの『政治学』と共同食事論

1、リュケイオン（学園）における共同食事について

アカデメイアの共同食事において、プラトンの亡き後に「シュンボシオン規則」がつけられたという。第二代学頭スペウシッポスと第三学頭クセノクラテスの時代である。その一つは学頭代理が共同食事の責任者とされ、アルコンと呼ばれた。アルコンは年長の研究生が交替でつとめる共同食事の管理者であった。アリストテレスが作ったリュケイオンにおいても共同食事は継承された。しかし、アカデメイアで作られた「規則」は守られなかったようである。リュケイオン学園の第4代学頭リュコンのころに、華美な風習がつよまり、共同食事も派手で贅沢なものになっていった。多くの人があるための出費を恐れて学園への入学を断念することになったといわれる。リュケイオン学園にもアルコンがおかれた。アルコンは共同食事を開催するにあたって、学生から会費を徴収し、ムウサ女神への供物を準備し、招待客の世話など、各種の仕事をこなすことになった。こうした煩雑さも加わって、共同食事は「たんなる飲み食いのための機会」に過ぎないものになってしまう場合もあったという⁽¹⁵⁾。プラトンのアカデメイアでは、「かき料理」は贅沢料理とされて食卓には出されなかったという。それに対比してリュケイオンでは、共同食事の料理の出来が悪いとって料理人が鞭打たれるということもあったといわれる。

そうした傾向があったようであるが、共同食事はアリストテレスのリュケイオン学園に引き継がれたのである。アリストテレスは、「共同食事」の歴史・社会的な事実と意味とを実に驚くほど丹念に研究しており、その重要性や価値について熟知していた。その点は『政治学』に目を通せばよくわかることである。

2、アリストテレスの共同食事論について

アリストテレスの『政治学』⁽¹⁶⁾は、国制（国家形態）論・国家論に関する研究であるが、「共同食事」もまたそれに不可欠な論点であった。したがって、その論考は、制度論的な考察であるといえる。しかもそれは、共同体における人心や教育の力を深く洞察した制度論（国制論）としての共同食事論となっている。そこにポリス国家に独特な固有の思想が表明されている。

結論的に言えば、アリストテレスは「共同食事」を民主政（民主制）の象徴の一つとして位置づけている。「共同食事」に象徴されるような社会関係・国家形態（ポリス国家）こそが、市民の意思を尊重し、貧富の格差を緩和し、僭主政に貶められることを防ぎ、可

能な限りにおいて平等の精神に基づく市民共同体をつくることがポリス国家の理念であり形態であると、実証的な事実考察を行っている。

アリストテレスは、国の始まりを家族や生活方法（生活共同体の暮らし方）それ自体から論じはじめる。例えば、ヘシオドスの時代には、大切なものは「何よりも先ず第一に家と妻と耕牛」といわれ、「家」とは「食卓を共にするもの」「飯櫃を同じうするもの」と呼ばれた。このような生活感覚が国家・社会統治の必要・必然性と結び合うと「共同食事」は慣行として、さらにはそれを、立法でもって統治の制度的一環に組み込みこもうという思慮が働くことになる。アリストテレスによれば、その共同食事の歴史的な始まりはかなり古く、紀元前 1000 年以上前の地中海を取り囲む古代エジプト、イタリアやギリシア・クレタ文明の時代に遡るといふ（『政治学』第 7 巻、1329 b）。クレタやラケダイモン国（スパルタ人）においては、立法家が共同食事を立法化することによって、生活に必要な財産を共同に使用するものにしたといふ（『政治学』第 2 巻、1263 b - 40 ~ 1264 - a）。このようにして、すべての市民が生きていける土台としての「共同食事組」が作られて「胞族」（プラートリア）や「部族」（ピューレー）という家族的連合を共同体とすることによって、はじめてポリス（国）の土台が作られたと歴史的状況を考察している（同上、1264 a - 10）。

この共同食事の実態は地域によって違いがあったといふ。クレタ文明においては、ラケダイモン国のスパルタ人とはことなつて、共同食事にかかわる経費は土地所有や財産の多寡にはかかわらず、公の費用で女も子どもも男もすべての人がそれによって養われる工夫がされていた。すなわち、公有地から収穫された農産物と公有地で飼育された家畜との凡て、およびペリオイコイ（市民権をもたない農業などの生産者、周辺人）が支払う貢物のうち、ある部分は神々と公共事業のために割り当てられ、またある部分は共同食事の費用にあてられた。他方、スパルタ人（ラケダイモン国）の場合、当初は、各人が頭数で定められた「割り前」（食事の経費）を負担した。それゆえに、経費負担ができない住民は共同食事の席に着くことはできなかった。それは同時に、「国民権」（市民権）に与ることを禁じられることを意味した（『政治学』第 2 巻、1272 a）。その改善のために後になって、土地を最大限均分化する政策がとられた、とされる。

アリストテレスは、こうした原初的なギリシア圏を中心とする社会・文明の段階において、「共同食事」への多くの市民の参加を民主政を支え発展させる国共同体のあり方として積極的に評価していた。換言すれば、そのような共同体的な社会状況をつくりあげていくことが富裕層を軸とする特権階級が市民を支配するという僭主政の弊害を阻止する力となると考えていた（『政治学』第 7 巻、1330 a）。この点をアリストテレスは以下のように考察した。

僭主たちの住民支配と権力保持の原理とは、次のようであったとアリストテレスは述べる。すなわち、①秀でた者たちを刈り取り、思い上がった者たちを片付けること、②共同

食事も政治的クラブも教育も許さず、③その他、「思い上がり」と「相互の信頼」が生まれるような「研究会や学問的な集会」を許さず、④すべての人々をできるだけ面識のない者にするためにあらゆる手段を講ずること（例えば、監視人を置く、スパイを放つ、「告げ口家」を集会や寄合に派遣する）、であるという（『政治学』第5巻、1313 b）。このようにして僭主政は、市民をつぎのような社会的関係（面識があること、信頼関係を築くことを貧困化させる）のなかに閉じ込め、人々のなかに社会的能力が発展していくことを抑圧すると述べている。

すなわち、①その第一は、「被支配者たちがちっぽけなことしか考えないようにすること（というのは心のちっぽけな者は誰にも謀反しないだろうから）。②第二は、「被支配者たちがお互いを容易に信じないようにすることである（というのは僭主政の解体は或る人々が互いに信頼し合うようになってから初めて起こるのであるから）。③第三は、「行動に対する被支配者の無能力である（というのは出来ないことを企てる者は誰もいないので、もし能力が存しないなら、また僭主政を解体するようなことはしないからである）」（同上、1314 a）。

民主政は上記のような僭主政とは原理的に正反対のものであると、アリストテレスは述べる。民主政とはまず何よりも人間の命と生活を保持確保すべきものであり、国外からの他民族の侵略にあたっては心を合わせ一致団結して自己の生活圏を守ることであった。このような観点と理由から、アリストテレスは「民主政は共同食事やその他の日常生活の点に見いだされる」（『政治学』第2巻、1266 a）。「また、共同食事については、その存することは善く組織された国々にとって有益であることを、凡ての人々が等しく認めているが、われわれもやはりそうだと認める」（『政治学』第7巻、1330 a）と結論づけている。

3、国制論としての共同食事論（まとめ）

アリストテレスの共同食事論は、大きな枠組みとして言えば、国制論の一環をなすものである。国制のあり方が人間のあり方（善き生き方）を規定するものであり、また人間の本性（自然性）を発展・発達させることによって善き国家、徳ある国家、すなわち、人間の本性（人間的・自然的・人間的）や幸福を高めることができる国家（国共同体）を創造するものであるという見方を展開したものである。「人間は自然的に（本性上）ポリス（国的動物（政治的動物）である）」「人間は自然によって国的動物（政治的動物）である」という『政治学』の言葉（定義）は、国制と人間性との一体性をあらわす言葉である。この言葉は善くも悪くも人間は国（政治）の中にあることによって、その本性を完成させるものであるというメッセージである。

またこの点について、「かような共同体（国）に向かう衝動は自然に凡ての人間に具わっている、…国を組織した最初の人はいはより最大の善事の原因者である」と述べている。人間を主体において言えば、完全で自足的な生活のために家族や氏族が善き生活において

共同する時、初めて国（政治）が存する。そのために、国のうちに親類団体や胞族団体や祭祀団体や社交団体が生まれた。そして、「かようなものは友愛の働きによって作り出されたものである、というのは共に生きることを選択するのは友愛であるから。だから、国（政治）の目的は善く生きることである」。これら種々の共同体も、そのような目的意識をもって営まれた。「共同食事」は、そうした目的を共有しあった生活共同体であり、それがポリス・国共同体（政治的共同体）の実体であった。

山本光雄は、そのようなポリス国家を「教育団体」と呼んでもよいと述べている。⁽¹⁷⁾ その意味は、すべての市民が生活すること、生きることを保障されること、そのためにポリスの統治・運営（政治）に全員が共同して加わること。その営み（政治的教養）を通して、有徳の市民と国家社会を創造する人間の本性を蓄積し高めることができると、アリストテレスは理想の国制を展望したのである。共同食事もまた、このような文脈において「教育団体」（あるいは政治的共同体）であったということになる。プラトンの『饗宴』は、そのもっとも洗練された、人と人とのつながり（主権者）を育て、人間の本性（自然性）を発揮させる人間形成と社会形成の場であったといえる。

Ⅳ、歴史家の研究からみたスパルタ人の共同食事

1、プルタークの「英雄伝」における共同食事の起源

プルターク自身は「自分は歴史家ではなく伝記作家である」と称しているが、単に人物の業績に焦点をあてた「伝記」ではなく、歴史研究の産物を残している。その一つである『プルターク英雄伝』（全 12 巻）⁽¹⁸⁾ のうち、第 1 巻にはスパルタ人の立法家であったリュクールゴスの伝記が含まれている。プルタークはギリシア本土のポイオーティア（アッティカの北部）地域に所在するカイローネイアの出身の紀元後 1～2 世紀を生きたギリシア人であり、若い頃アテナイで教育を受けたという。『プルターク英雄伝』は彼の最晩年の作品である。これをベースに、スパルタ人やリュクールゴスの国制に関する立法を概観し、共同食事の法制と実態についてみていくこととする。

リュクールゴスが活躍した紀元前 7 世紀のスパルタ人のポリス（スパルタ人によって創られたラケダイモン国、以下スパルタと記す）は、経済体制をめぐって大きな変革期にあった。すなわち、スパルタはメッセニア領に対する征服戦争に没頭し同領を併合し、すでに征服していたラコニアと合わせて農耕地を倍増させた。この大事業をよって、スパルタは商業的発展という助けなしに、農業中心の自給自足的な国家体制に命運をかけることになった。これによってスパルタ人は「農夫であり、農夫でありつづける」ことになった。⁽¹⁹⁾

このような時代において、ポリスの国家体制を整備するリュクールゴスの改革立法がすすめられた。「スパルタ」は、「スパルタ主義」などの言葉から凶暴な権力主義の代名詞のように思われているが、太田秀通が指摘するように、それは真実ではない。⁽²⁰⁾ むしろその反対で、古代ギリシアの 300 近くあったポリスのなかでもっとも強く民主政を追求した

ポリス国家である。それを象徴するのが立法家・リュクールゴスの改革であった。共同食事もまた、この時期の改革によってスパルタの国制の一部となった。

プルタークは、リュクールゴスの主要な改革立法は、三つあったという。⁽²¹⁾

- ①第一は、「元老」と「元老院」の設置である。スパルタには当時、二人の王がいたが、この王の独裁的な政治を抑制すること、および民衆迎合や衆愚政治に陥らないようにするための改革であった。「元老」は28人、これに2人の王を加えて30人からなる「元老院」とした。その上で、市民の「民会」や「集会」を開催して、元老院から出される議案を論議することなど、「裁決権」を民衆に与えた。主権者は市民（民衆）であるとしたのである。さらに、「少数政治」によって「悪政」に陥らないようにするために「エフォロス（監督官）」という「役人」を置いた。
- ②第二の改革は、「土地の再分配」である。当時、不平等が極端に達し、土地を持たない多数の貧困者の存在が国家の負担になっていた。富が少数者の手に流れ込んで富裕層と貧困層との格差が拡大し、傲慢、羨望、詐欺、遊惰などの世相が「国家の病」といわれるような事態に覆われた。これを解決するために、土地全体を公に提供させ初めから分配し直すこととした。こうして生活の基盤を平等ならしめ、社会に「徳性」こそが人間評価の第1位となるようにした。これによって、ソフィストや遊女たちも稼ぎのために質素で質実剛健になったスパルタに行くという状況がなくなったという。
- ③第三の改革は、「共同食事」「会食」の制度化である。これをプルタークは「最も立派な政策」⁽²²⁾であったと述べている。これも贅沢を排し富を追う心を取り除こうとするものであった。

プルタークはこの共同食事について次のように書き残した。

「市民たちは互いに共通な一定の料理とパンのあるところに集まって食事した。・・・テオフラストスの言葉を使うと、富を望ましくないもの、富ならざるものにするために、食事の共同と食物の質素を図ることである。金持ちも貧乏人と同じ食事に行くから、多くの財産を使うことも味わうことも、否、見たり見せたりすることもできなくなった。あの、富が盲目で生命や動きもない絵のように横たわっているという、周知の言葉は、太陽の照らす国々の中でスパルタに於いてのみ見られた。家で先に食事を済ませて満腹のまま会食に行くことは許されなかった。他の人が念入りに見張りをしていて、自分たちと一緒に飲みも食べもしないものを、自制力のない、共同の食物を食べようとしめない意気地なしだと非難したからである」⁽²³⁾。

以上のようにスパルタでは、物質的にポリスを維持・存続させることと、そのために不可欠な共同体的精神を醸成するための制度とが一体なものとして制度化されたのである。

2、プルタークがみた共同食事の精神的・教育的な意味について

プルタークの記述はこれに尽きず、共同食事の精神的・教育的な意味の検討にも及んで

いる。それはプラトンに心酔したプルターク自身の問題関心のなせる業でもあろう。

この点について、プルタークはクレタ人の集団食事・会食の事跡から話を始める。クレタ人はこの会食のことを「アンドレイア」と呼んだ。この言葉と同じ意味の言葉をスパルタ人は「フィディティア」と呼んだ。この言葉は、「フィリアー」（友情）と「フィロフロシュネー」（好意）を含意している。さらにまた、「エウテレイア」（簡素）及び「フェイドー」（節儉・儉約）の習慣をつけるという意味をもっている。そしてまた、「デアイタ」（生活方法）や「エドーデ」（食物）と並んで使われる「エディティア」という言葉から来たものであるという。これらの関連する多様で多義的な意味を含んだ言葉が「フィディティア」（共同食事）であり、その言葉が意味する事柄である。

この共同食事に参加する会食者は 15 人位か、それよりもわずかに少ないこともあった。会食者は毎月、銘々が一定量の大麦、葡萄酒、チーズ、無花果や狩猟で捕ったものなどを持参して会食したという。このような会食は長い間、厳密に守られて行われた。⁽²⁴⁾

以上のように、集団食事は、共同体構成員（市民）の平等・共同・連帯・信頼関係を維持発展させるための生活方法であった。共通・共同の食物と食事とが、人と人とを結び合わせ、心を一つに合わせて社会・共同体を守る要となった。

そのことを土台にして、共同食事それ自体が教育的機能を果たした。プルタークはこの点について次のように述べる。

「会食には男の子たちも節制を教える学校へ連れて行かれるようにやって来て、政治に関する話を聴き自由を教える教師を見て、自分たちも冗談や揶揄を浴びせても悪ふざけに陥らず、揶揄されても腹を立てなくなる癖を付けた。からかわれて平気であることが、スパルタ風の特色だと思われていた。我慢ができない人は相手に止めて貰うように頼むことができた。そうすると相手はからかうのを止めた」⁽²⁵⁾。仲間に対するからかい、揶揄、誹謗・中傷など、今でいう「いじめ」は会食の集団のなかで集団的に解決されていった。会食仲間の中でのこうした出来事は会食集団の外にもらすことも禁じられた。子どもの中の年長者が子ども集団の世話係りとなって、調停の役を果たした。その年長者は会食会場の入り口の方を指さして「あの入り口から外へは一つの言葉も出ていかない」と諭したという。仲間内の「いじめ」などを敢えて口外するなという指導である。集団食事のこのような場面は、自他の尊重という徳や人格形成の意識や自覚がみなぎっていたと考えさせるものである。それに従わない者は、全員の投票によって集団食事に参加する資格を剥奪された。

リュクールゴスは共同食事を制度化したが、その運営法については法律を書き残すことはなかった。ポリス国家の幸福と徳性にかかわることは市民の修養や教養によって達成されるべきであると考えていた。「人々の自由意思と絆」をもって行われるべきであると考えていたからだという。その方が法によって人々に強制するよりもいっそう「丈夫な絆」が作られると確信していた。

共同食事という場での人間形成に限らず、リュクールゴスは子どもの教育について大きな関心を抱いていた。スパルタの子どもたちを金銭を払って家庭教師に預けることや、各家庭に教育を銘々にゆだねることを止めさせた。リュクールゴス自らが、子どもが7歳になると子どもたちを集めてきて、「共同教育の場」をつくった。そこでは、互いに同じ規律のもとに同じ食べ物を食べて生活させた。遊戯も学習も共同して取り組むように躰けた。年長の若者や老人たちが、読み書きや遊戯・体育や生活法の万般についてすべての子どもたちの監督者や教師の役割（パイドノモス、エイレーン）を果たさせた。エイレーンで20歳になっている者は戦争のときには自分の部下を指揮し、家ではエイレーンを食事の際に給仕に使う。身体の丈夫な子どもたちには薪を運ばせ、小さな子たちには野菜を運ばせる。ポリスの政策的な意図で、その野菜は盗んでもってこさせるのである。ある子どもは野菜畑に入り込み、またある子どもは大人たちが会食しているところへ狡猾に注意深く忍び込んで持ってくる。もしも見つかってしまつて捉まると、鞭でしたたかに打たれる。会食の場での子どもたちの食事は少なめであったが、それも不足を補おうとして子どもが大胆になり狡猾になるようにとの大人の意図的な配慮、教育目的であった。それはポリス国家を守るためという大義に基づくところの「教育」「訓練」であったのである。

3、J. ブルクハルトのギリシア文化研究の一端から

19世紀後半から20世紀初頭にかけてJ. ブルクハルトの『ギリシア文化史』⁽²⁶⁾が刊行された。ブルクハルトも共同食事について触れているが、その軍事的意味に着目し強調する。ブルクハルトは、大人や子どもの日常生活、したがって共同食事においても、その根底には「武装巡察」「戦争予行演習」という目的があり、それこそは不可欠なものであったという。それなくしては、スパルタとメッセニア（周辺地域）のヘイロータイ（奴隷）やペリオイコイ（辺民）の抵抗や反乱を鎮静させておくことは難しかったからであるという。スパルタ人はエウロタス河畔にある首都にいたが、ヘイロータイやペリオイコイは周辺地域に移動していた。そしてスパルタ人は常に「不断に臨戦態勢」にあった。このような日常性こそはスパルタ人にとってもっとも重要なものであった。日々常に、ポリスを守り出陣する準備を余儀なくするものであるからである。

おいしくはないが滋養に富んだ「黒スープ」（メラス・ゾモス、肉を血で煮たスープ）を共同食事で食さねばならなかった理由も、体力・戦力を維持向上させるためであった。滋養のあるよい食事という点ではスパルタ人は、アテナイの中流階層の食事よりも勝っていたとも言われる。

こうした事情のもとで、共同食事では「酒の楽しみ」はこの上なく細心に抑制されねばならなかった。それは、「国家の安全が常時素面であることに懸っていたから」である。この決まりは大層厳しいものであった。「酔っぱらったヘイロータイが共同食事の場に連れてこられて慰みにされ、見せしめのために若者たちの見世物になったのである」。

J. ブルクハルトは、スパルタ人像を次のように集約する。「総じてこの民族はまさに一つの軍隊であり、その国家は陣営を張った国家である」⁽²⁷⁾と。

このことを不可欠の条件としながら、スパルタ人のポリスは「自由人（市民）の共同体」であり（アリストテレス）、「自由民」の「広場」（アゴラ）を持ち、集合・集会し、また、饗宴・共同食事の場を築いて、会話・対話・論談することを日常生活とした。

ブルクハルトはこのようなスパルタ人の生活・人々（市民）の交流について、「会話なくしては精神の発達、他のどの民族の場合以上に考えられない」⁽²⁸⁾と考察している。この洞察と指摘は重要である。アゴラ（広場）とシュンポシオン（共同食事・饗宴）こそは、スパルタ人の「精神の発達」「生来の政治的生物」としての人間の本性を発揮・開発させる場所であったということである。

スパルタの市民はみずから農耕地を耕し、自給自足によってみずからの物理的な生存維持を図るとともに、ポリス共同体の一員として民会や共同食事に参加してポリス国家を生き、また同時に危機に際しては戦士として命をかけるという過酷にして厳格な人生を生きたといえる。それゆえにこそ、共同食事という営みが、一面で人々に安心感を与え、くつろぎや憩いを与え、英気を授けるものであったといえよう。他面では、プライベートな個人生活は縮小され、すべては公的な人間（市民）として生きるという心性や倫理観を背負わされるという労苦をも味わったであろう。

V、結語

この論考では、歴史時代の始まりの時代における共同食事・会食の実状について古代ギリシアを中心に検討した。共同食事は広い意味では人類社会における当たり前の生活であるというべきであるが、古代ギリシアの共同食事はポリス国家において格別の意味を持った「制度」であり国制の一環であった。その起源は紀元前 2000 年ころからのクレタ島などを中心とするミケーネ文明の時代に遡るとされている（アリストテレス『政治学』）。そのような国制・制度としての共同食事の歴史的事実をみることによって、そこにこめられたその特別の社会的・思想的な意味を把握することができる。

古代ギリシア、特にスパルタ人における共同食事は、次のような特徴をもっていた。

第 1 に、市民、ペリオイコイ（周辺人）、ヘイロータイ（奴隷）という三つの階級で構成されたポリスの中で、市民という資格をもった人間にのみ許された制度であった。その意味では、特権階級の制度であるということである。

第 2 には、ポリスとしての国力を向上させるためには経済的・社会的な平等こそがその要であり、僭主的な支配から解放されることによって最強国に発展することができた。「自由にされるや市民各人が自分自身のために自ら進んで働いたことは明白である」（ヘロドトス『歴史』）。そのような民主政への憧憬や主人公意識が共同食事を定着させた大きな要因となった。

第3に、その共同食事によって市民の間に共同・連帯・友愛・信頼という共同体的な意識・心性が醸成された。

第4に、ブルクハルトが強調するように、そこでの会話・談論風発によって市民の市民としての人間的な「精神の発達」が促進された。

古代ギリシアの歴史的な特殊性・固有性は異にしながらも、その後、および今日の社会においても共同食事・会食の営みや慣行は絶えることなく、人間社会の共通・普遍の風俗（生活習慣）となっているし、また、教育の場では意図的な教育活動となっている。古代社会以来の共同食事にこめられた普遍的な精神は、現代人においてもまた、その重要性を忘れることはできないものである。今日の現代社会における「共食文化」や「食育」の遠い起源の一つは、以上述べてきた歴史時代の古代ギリシア圏の人々の生活文化のなかに見出せるといってよいであろう。

本稿では直接に論ずることはひかえたが、日本における「共食文化」の衰退・崩壊はすさまじいほどである。この事態は、幼児から大学生、社会人にいたるまで共生の能力・社会的能力を衰退させる遠因となっているとされる。人と人との結びつきや社会的能力の形成こそは、生きる力や教養形成の基底であることも実証されている。本稿は、そうした問題意識をもとに、教養の社会的・人間的基底である「共食文化」の起源の一つとして、古代ギリシアにおける「シュンボシオン」を上述のように検討することを課題としたものである。

注

- 1、プラトン著、藤沢令夫訳『国家』(上)(下)、1979年、岩波文庫。
- 2、W. G. フォレスト著、太田秀通訳『ギリシア民主政治の出現—紀元前800—400年のギリシア政治の性格』1971年、平凡社、「第V章 スパルタの革命」167頁～209頁。
- 3、アリストテレス著、山本光雄訳『政治学』1961年(初版)、岩波文庫。
- 4、川島清吉著『プラトンのアカデメイア』1977年、公論社、56—57頁。
- 5、川島清吉 同著、58頁。
- 6、川島清吉 同著、58頁。
- 7、H. I. マルー著、横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳『古代教育文化史』1985年、岩波書店。116頁、「第1章 教養の文明」。
- 8、川島清吉著 同上、58頁。
- 9、プラトン著、岡田正三訳『プラトン全集第2巻』1969年、全国書房版。
- 10、廣川洋一著『プラトンのアカデメイア』1999年、講談社学術文庫。
- 11、廣川洋一著、同上、131頁。
- 12、廣川洋一著、同上、133頁。
- 13、廣川洋一著、同上、130頁。
- 14、川島清吉著、同上、57頁。
- 15、廣川洋一著、同上、133—134頁。

- 16、アリストテレス著、同上、『政治学』。
- 17、アリストテレス著『政治学』（岩波文庫）の山本光雄の「解説」、458 頁－ 461 頁。
- 18、『プルターク英雄伝』（一）、河野与一訳、1952 年、岩波文庫。
- 19、W. G. フォレスト著、同上、148 頁－ 149 頁。
- 20、太田秀通著『スパルタとアテネー古典古代のポリス社会一』1970 年、岩波新書、79 頁。
- 21、同上『プルターク英雄伝』（一）、110 頁－ 120 頁。
- 22、同上、116 頁。
- 23、同上、116 頁。
- 24、同上、118 頁。
- 25、同上、119 頁。
- 26、J. ブルクハルト著、新井靖一訳『ギリシア文化史・第一巻』1991 年、筑摩書房。
- 27、同上、156 頁上段。
- 28、同上、105 頁。